

# 乳房炎アンケート成績報告

菊 佳男

(独) 農研機構 動物衛生研究所  
日本家畜臨床感染症研究会事務局

平成 20 年度家畜共済統計表によると、乳用牛等に係る病傷病類別事故件数は 1,410,717 件であり、その中でも乳房炎に代表される泌乳器疾患は最も事故件数が多く、428,740 件を数え全体の 30.4% を占める。わが国の乳用牛病傷事故原因の最大の問題である乳房炎は、病原微生物の乳房内感染によって引き起こされ、乳質ならびに泌乳量の低下を招く疾病である。乳房炎によって酪農家は、1) 生産乳量・乳品質の低下、2) 淘汰更新費、3) 治療費、4) 出荷制限期間の生乳廃棄等の損失を被っている。臨床症状の見えない潜在性乳房炎による乳量および乳質低下も加味すると、乳房炎全体の損害はさらに甚大となる。

乳房炎を引き起こす病原微生物は 140 種以上知られており、その多様性が治療を困難にしている。黄色ブドウ球菌 (*Staphylococcus aureus*) は代表的な伝染性乳房炎の原因菌であり、また大腸菌群や連鎖球菌等は代表的な環境性乳房炎の原因菌である。病原微生物の関与(病原因子) が乳房炎の原因であることは事実であるが、それ以外の畜舎環境や搾乳環境等(環

境性因子) と生体の防御機能(宿主因子) も密接に絡み合っており、本疾病は発症する。そのため、乳房炎を防除していくためには、病原因子、環境性因子および宿主因子の多岐に渡る要因を把握し、それぞれに適した飼養管理、診療、治療および予防を行うことが重要である。

乳房炎は、全国的に多くの産業動物臨床獣医師が生産現場で日常的に遭遇するが、疾病防除の取り組み方や診療および治療方針の現状についての全国規模の実態調査は十分に行われていなかった。しかしながら、2009 年度に行われた本会アンケート事業によって、全国の臨床獣医師の協力のもと「乳牛における乳房炎の診断、治療、予防に関する全国アンケート(本会会誌 5 巻 2 号掲載)」が実施され、全国の乳房炎対策の縮図を示すことができた。今回は、その時得られた情報を基に、特に黄色ブドウ球菌性乳房炎ならびに大腸菌性乳房炎の予防、診断および治療に焦点を当てたクロス集計を行い、それぞれの乳房炎に対する全国の臨床獣医師の取り組み方や考え方について、興味深い知見が得られたので報告する。